

準拠集団としての「学界」
— R. マートンの科学社会学 —

佐賀大学 新島 康夫

1. はじめに

高等教育(大学)の社会学は、いくつかの方法を開発するとともに、その研究対象も多岐にわたるようになった。我が国にも教育社会学の研究の主要な構成部分となっている。その背景には、今日の高教育の巨大化に伴う政策上の問題や、生涯教育化時代における大学と社会との新しいパートナーシップを目指した理念の模索などがある。学問に関するプラグマティズム的発想に支えられたアメリカ教育社会学の伝統もこの発展に働いているといえよう。

しかし、そうした「膨張」にもかかわらず、「科学の発達」という盛上りに今一つ欠けていっているという思いを覚えるのは少数ではあるまい。それは、高等教育(大学)の「社会学的」研究が未だ、「研究領域」の次元と脱して、「研究分野(discipline)」を形成するに至っていないからではないか、と考えられる。

この研究領域も次第に、それぞれの研究指向の方法原理とつながっているものを整理し、T. S. フーンの言う「パラダイム」がいくつか考えられるべき、あるいは、考えるべく発展している方向へと進む時期に来ている。科学の社会学は、若い「研究分野」であるが、その際の一つの方向づけを促されると思われる。従って、高等教育(大学)の「社会学的」研究の領域上の接合面からのみ「科学の社会学」の有効性をみだすはならない。社会学における独自の一分野として成立せしめられている科学社会学の伝統(固有性や研究指向性)ないしは存在イデオロギーといったものに着目する必要がある。

そのためのアプローチとして、①その分野の発展を歴史的、社会的にたどり、発展のエネルギーとなった内的原理(principle)や信念(belief)は何を探ること、②この分野を押し上げている成立の基底(存在根拠)を問うこと、③この分野に「圧力」をかける周辺領域、例えば科学史、科学理論などの学際的な観点から外在的考察を行なうこと、そして最後に、④この分野の主要な理論の「理論的」研究があげられる。マートンの科学社会学理論の研究もそれ(④)に属する。

但し、理論という言葉は注意を要する。フーンのパラダイムの概念を曖昧にしているものの一つは、彼が自然科学的の意味での「理論」と社会科学の意味での「理論」と混同して用いている点である。機能的に見て、社会科学という「理論」は、異なる観点や立場から言えば、ただのドグマに置き換えられる代物になる場合がある。

ここでは理論を、少なからずある研究分野をコントロールする威信をもつ「論理の構成」ととらえる。即ち、それを押さえることにより、その分野の学問的特質(伝統)がわかるというものである。その場合、その理論の正当性あるいは有効性に制限を加えることは、ある意味で二義的なものとみる。そこで、少し概念的になるかも知れないが、マートン理論を「準拠集団としての学界」という点からとらえ、科学社会学の論理的構成を眺めたい。

2. マートンの科学社会学

マートンの科学の社会学を次のような点に特徴づけられることができる。例えば

(1) 科学の発展観

彼は学界(scientific community)を「確証された知識の体系の発展」とみる。科学者の報酬(reward)は、彼がその社会の規範(エトス)に忠実に同調した行動の結果が同僚に是認され(同僚モデル)、その成果として尊敬を集め、地位を得るという図式になる。科学者には、支配-服従関係は本来なく、科学行動のプロセスから支配的地位を獲得していく。

従って、マートンにおいては科学の発展は、何よりも同僚からの専門的認知(professional recognition)のための評価が容易となるよう理論体系が制度化されることと云える。科学は累積的に増加するという累積的発展モデルである。言い換えば、科学の発展と科学の制度化とは彼において同義であると云える。科学が制度化されるということは、評価の過程が「公正」におこなわれるようメカニズムが働くことであり、その追求の課題とする点から「学界」の制度的特徴とされる。

(2) 科学社会の組織観(共同体観)

学界がある種のまとまりをもちて存続維持されるためには、その成員(科学者)のその社会への精神的な絆の他に余り手段をもちない。確証された知識の発展を目的とする社会集団を個人と結びつける感情や態度の総体であるテラール=倫理感である。共同体的発想から生じた彼の科学のエトスは、道徳的規制の意味合いが強い。M. ウェーバーの言う、対外道徳(共同体それ自体を防衛すること)と対内道徳(共同体的規制に服すること)がある。

従って、ソトに對する自己維持のメカニズムを重視して、またソトに對する平等(共属感・連帯感)即ち同僚意識が強調される。そこから、彼の科学の社会学的研究の論理構成は、専門的認知という成員への連帯感、共感に基づく精神的、榮譽的「報酬」が分析の中心的課題とされる。例えば、一見逆機能とみられるプライオリテイ論争(「同時発見」multiple-discoveriesによる先陣争い)も科学共同体(scientific community)の文脈の中不正機能とされる。なぜなら、マートンにとって科学者の絶え間ないプライオリテイ論争は、彼らのその社会への所属の強い願望のあらわれを意味するからである。科学者の逸脱行動も、マートンにとって、科学者の共同体の規範への不適応や価値(オリジナリティの尊重)からの逃避の面、いわば共同体への所属意識(忠誠)の喪失を意味する。逸脱と心理的不適応や反抗とは区別されなければならない。機能主義の社会学の視点とすれば、逸脱現象はとこまも社会的統制の枠からのほみ出し、即ち社会的逆機能に他ならない。

マートンのこうした科学および科学社会の形態・構造・機能に関する法則の探究の仕方、つまり問題の抽出の仕方や謎解きの仕方は彼の「準拠集団論」を根拠にしている、と考えられる。

3. 準拠集団の理論

マートンは、統合(社会統制)という観点から「準拠集団」をとりえる。つまり、規範がその社会の存続維持にのみ機能せず、また、その社会が成員に對して規範をのみ正当化するかという観点である。本来、準拠集団の概念はむしろその逆に、個人の行為選択や動機づけという主体的な見地の概念のはずである。だが、その場合どちらかと云えば、心理的主観主義や観念論に落ち込み易い。マートンはこの概念を中

範囲の理論の中に取り込むことにより、社会学的手法による実証可能な概念に変えることも可能になるといえる。

今回の発表では、彼の準拠集団論は、科学の諸現象の法則をみる視点として、どのような形で科学社会学に具現されているかを考察したい。彼の「同時発見」('Priorities in Scientific Discovery' [1957]、'Singletons and Multiples in Science' [1961]、'Multiple Discoveries as Strategic Research Site' [1963])や「アンビヴァレンス」('The Ambivalence of Scientists' [1963])の研究にその点がとくにうかがえる。